

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第21号(平成28年1月15日)

読者数：548名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

振り返れば未来が見える

広島県経営企画アドバイザー
大阪芸術大学非常勤講師 井上英之



「振り返れば未来が見える」、私が1990年代に東京臨海副都心の開発プロジェクトに従事しているころ、当時東京大学教授であった木村尚三郎先生に言われた言葉である。

「未来的なまちづくりの計画を立てる際は、過去からの視点を忘れてはいけない。東京には江戸東京400年の歴史と蓄積がある。その中に大きなヒント、大事な視点が隠されている。それを踏まえたプランを考え、実行してほしい」と。

当時木村先生にいただいた言葉をこのところまた思い返す機会が多くなっている。現在の私の業務の大半は、広島県経営企画アドバイザーとして、定住促進に関わる市町の「暮らしブランディング」に関わるアドバイス業務に充てられている。政府が旗を振る形で「地方創生」の一環として、広島県でも多くの市町が「定住促進」に力を注いでいるが、私がこの業務に関わり始めた昨年の6月時点では、市町の「定住促進施策」の重点は支援制度の制定であった。

支援制度とは例えば、子育て支援として助成金を出したり、引越代を負担したり、医療費助成をしたりといった、主として対象者の費用負担を公費で行うことである。支援制度主体の定住促進訴求は、「費用負担合戦」を誘発するきらいがあり、地域の魅力以前に「カネの魅力」で勝るところを受益者は選び、支援が切れると再び転出してしまおうといった負の側面を併せ持つことになる。

「暮らしブランディングによる定住促進」とは、そういった支援制度訴求ではなく、地域の魅力発掘とその発信に立脚する。地域のブランディングは、大別して「特産物ブランディング」「観光ブランディング」「暮らしブランディング」の3種より成り立つが、これらは相互に関連しており、とくに首都圏エリアから広島のようなローカルへの移住定住となれば、「しごと」の問題が切り離せないため「雇用創出」「産業振興」といった視点も必要であり、特産物ブランドの販売拡大や観光産業創出といったことが雇用を拡大して、移住定住者の受け皿となるといった関連性を見渡す視点が欠かせない。

こうした視野の広がりと同時に最も重要なのが、地域の魅力の再発掘である。地域の魅力には地元の人にはしか見えない魅力と外からの視点でなければ見えない魅力が存在する。移住定住者を惹きつけるのは多くの場合、後者の魅力である。地域に残された自然や伝統・文化といった日常的な魅力は地域の人にはあまりにも当たり前すぎて、それが他者にとって魅力的であるとは気づきにくいようだ。戦後の高度成長がもたらした全国画一化の歯車は、地域間の差異よりも同質化を促し続けたため、地域の人々はより一層自らの地域の魅力に気づきにくい現状がある。

そこで「振り返れば未来が見える」である。高度経済成長以前にあった地域の姿こそ、むしろ未来における地域の魅力となる「資源」であるケースが多い。

例えばそれは、小川を舞う蜩であったり、細々と残された「祭」であったり、子どもたちを見守る町内会の仕組みだったりする。日常的に目の前の海で釣りをし、釣った魚でバーベキューをしたりすることは都会では簡単なことではない。

地域の人にとっては少しばかり汚れてしまったり、荒れてしまったりした自然・景観もよそ者の目には十分美しく魅力的である。こうした魅力は首都圏の若い移住希望者だけでなく、訪日外国人にとっても魅力となっている。

「田園回帰」の流れを大きな流れにすることができるか？その大きなヒントは「振り返れば未来が見える」ことによって発見できる地域の魅力・資源にあるのではないか。

20年以上も前の木村先生の声を思い起こしながら、業務に従事している毎日である。

ひろしまのまちづくりの動き

○袋町公園で大イノコ祭り

昨年11月7日・8日と本通り近くの袋町公園で大イノコ祭りがあった。従来の亥の子祭りは、子供たちが「いのこ いのこ いのこ餅ついて 繁盛せい 繁盛せい」と歌いながら、縄のついた石を地面に打ちつけて町内を回るお祭り。

大イノコは88本の竹の力によって1.5tの大石を空中に吊り上げ、その大石を「亥の子石」に見立てた新しいスタイルの「イノコ」である。4方から2本ずつ竹と大石をロープで結んでいき、10回目前後から浮き上がっていく、そのプロセスに臨場感がある。

大イノコ祭りは1990年から1996年まで7回続いたが、一度途絶えて2013年に復活し、今年で3回目。前回までは国からの補助金でやり繰りしていたが、今回から協賛金を募り自前の予算で若者たちが中心となって企画し運営した。



大イノコ

初日はなんとか天気が持って人も集まり、屋台も賑わっていたが、二日目は生憎の雨模様で人出も激減した。大イノコ祭り自体まだ歴史が浅く、広く市民に浸透しているとは言い難い。採算が取れなければ、やる気が萎えてしまう恐れもあるが、なんとか乗り越えて欲しい。若い人たちに期待したい。

(編集委員 瀧口信二)

○都心のまちづくり『ひろしまワールドカフェ』開催

広島県と広島市は連携して今年度と来年度の2カ年で「都心活性化プラン（仮称）」を策定する。そのため昨年11月29日に「みんなで話そう～だえんの未来～」と題して、都心のまちづくり「ひろしまワールドカフェ」を開催した。

現在再開発が活発な広島駅周辺地区と地盤沈下が懸念される紙屋町・八丁堀地区を楕円で一体化する都心の将来像を探るため、広く市民の意見を取り入れようという初の試み。



トークセッション

第1部 基調講演

・小林重敬氏（横浜国大名誉教授）による基調講演は、都心部における拠点間連携の先行事例（大阪市・名古屋市・福岡市）と官民連携のまちづくり手法としてのエリアマネジメントの考え方等を紹介。

・大阪市等も駅周辺の再開発による既存の中心市街地の地盤沈下が問題となり、お互いの地区連携を強化する方策としてエリアマネジメントを採用。大阪市はエリアマネジメント促進条例を制定し、そのエリアの地権者（事業者・住民等）から課金（税金）を取り、その金を民間のマネジメント組織に渡してエリアの管理運営・イベント等の実施を委ねている。

・行政が行うハード面の社会資本整備と民間が主体となって行うソフト面の管理運営が揃って

始めて本来のまちづくりができる。欧米のエリアマネジメントの BID と TIF の説明は省略。

第2部 トークセッション

・湯崎県知事と松井市長も登壇し、パネリストとして野村謙二郎氏（前カーブ監督）と松本裕美子氏（タレント）を交えて、広島市の街の印象や魅力的な都心にするための提案について討論。
・野村氏は野球やサッカー等のスポーツの活躍による貢献を、松本氏はだえんの中に誰もが気軽に集える場所を提案。

・湯崎知事は歩いて楽しい街とするため、歩道沿いの建物は人がアクセスしやすい環境作りと広島らしい景観作りを提案。現在のビルやマンションは関係者以外を寄せ付けない。

・松井市長は広島駅前の猿猴川の環境整備とそれに繋がる旧西国街道の活用を紹介。昭和初期に描かれた宮島から広島市街地全体の俯瞰図を示し、まちづくりのガイドラインを作って、広島市のまち全体のイメージとエリア毎の役割分担を市民が共有できるようにしたい。

第3部 ワールドカフェ

トークセッションを聴講した人の中から100人程度が残り、5～6名のグループに分かれて自由な対話を行い、メンバーを入れ替えながら対話を続けて意見を集約していく。

ファシリテーターはひろしまジン大学学長の平尾順平氏。参加者もワールドカフェ方式に慣れていないこともあり、思うような成果は上がらなかったかもしれないが、これからに期待したい。今回は会場が狭く、カフェにいるようなリラックスした雰囲気が出せなかったのは反省点である。

○広島市の復興の軌跡（第16回）～世界平和記念聖堂～

世界各地で紛争や過激テロが頻発し、大戦前夜の風潮が漂っている。被爆71年目を迎え、過ちを二度と繰り返さないためにも広島市の復興の軌跡を正しく理解しておくことが求められている。

昨年11月に日本建築家協会中国支部の大会が世界平和記念聖堂で開かれ、講演会に先立って施設見学とパイプオルガンの演奏を聞く機会があった。堂内に響き渡る荘厳な音色に圧倒されるとともに、残響で若干聞き取りにくい講演も聖堂の中で行うことの格調の高さを感じた。

被爆前後の状況

幟町教会は明治の中頃から現在地にあり、広島地区のカトリック教会の中心的存在。爆心地より1.2Kmの距離にあり、聖堂は倒壊し、司祭館は倒壊を免れたが延焼し、全てが灰燼に帰した。ラサール神父等も司祭館で被爆し重傷を負ったが、自力で脱出し、長束の修練院に避難。

仮設の教会

1945年12月にラサール神父は幟町に戻り、3畳のバラックを建てて居を構える。そこは聖堂・教室・応接間・居間・寝室等を兼ね、クリスマス・イブやミサが行われた。

1946年に教会の再建が本格化。組立式の6畳のセット住宅を2棟つなぎ合わせて聖堂兼伝道場とし、日曜日のミサやレコードコンサートに利用され、100人以上が集う。その年の12月には司祭館が落成。2階は記念聖堂が完成するまで仮聖堂として、終戦直後の教会活動を支えた。

設計の実施

ラサール神父は世界中を廻って被爆者の霊を慰める聖堂を建てたいと決意し、1946年8月から1年余の巡歴の旅に出て教皇の賛意も得、帰国後募金活動を開始する。慰霊だけでなく「世界平和」という理念を掲げたことにより世界中から多くの善意が寄せられた。

建設費の目処がついた段階で1948年に設計コンペを実施したが、1等の該当者がなく、審査委員であった村野藤吾に設計を委ねる。コンペは建築界に物議を醸すこととなったが、結果として、コンペの条件であった日本的・モダンスタイル・宗教的・記念的（荘厳性）という要求を満たす聖堂が実現される運びとなった。



被爆後空撮
丸印が敷地、手前縮景園



1952年建設中
(佐々木雄一郎氏撮影)



1954年竣工時、右側に
ザビエル・ホール



外観

建設

聖堂の建設は1950年から始まるが、先行して講堂と会館を合わせたザビエル・ホールが1949年9月に完成。1950年6月に朝鮮戦争が勃発して過度のインフレによる急激な物価上昇と建設資材不足に陥り、1951年には工事の中断に追い込まれる。

1951年3月に広島平和記念聖堂建設後援会を結成。募金目標を4千万円とし、それまでの義援金と合わせて総額1億円とする。

支援体制が整ったこともあり、施工者清水建設も工事を再開。設計者も施工者もコスト縮減のための知恵を出し合うとともに細部まで熱意を込めて丁寧に作り上げた。

完成及びその後

工事着工から4年余の工期で1954年8月に献堂式（竣工）。海外からの寄贈により聖堂に備え付けられた機器や装飾品等は下記のとおり。

- ・パイプオルガン（ドイツ・ケルン市）・大小4個の平和の鐘（ドイツ・ボフメルフェライン社）
- ・その他、ステンドグラス・本祭壇・祭壇の聖櫃・説教台・玄関扉・モザイク壁画等多数の品々

完工式での祝辞は、いずれも「**聖堂が世界からの浄財で建設されたことを称え、平和への道の象徴**」として意義づけた。愛宮（ラサール）神父の謝辞は、建設関係者の多大な労苦へのねぎらいと募金協力者への感謝の念を表した。

設計者の村野は10年後の姿を見て欲しいと語り、時の経過とともに環境に馴染み風格が出てくることを期待。数度の補修工事を経ながらも60年を経過した今なお健在であり、2006年7月には**戦後の建物として初めて国の重要文化財**に指定された。

完成後の動きとしては、ザビエル・ホールを解体して1979年7月にエリザベト音楽大学ホールが聖堂の南側に完成。1981年2月に教皇ヨハネ・パウロ二世は平和記念公園で全世界に向けた**平和アピール**を宣言し、聖堂を訪れて祈りを捧げた。平和アピールには「**過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは平和に対しての責任を担うことです。**」という一文がある。

廃墟の地に建ったこの聖堂は、復興に立ち上がる広島市民に希望と勇気を与えただけでなく、世界から平和への願いが込められた贈りものであり、私たちはそれに応えていく責務を負っている。

*参考文献：石丸紀興著「世界平和記念聖堂」



内観



遠景、右側半円形屋根はエリザベト音楽大学

□ほっとコーナー

『バトミントン』

食器専門店やまね 山根亜紀子

私は、8歳と5歳の子育てをしながら、広島市の繁華街・流川で食器などを取扱っている「やまね」で働いています。もとは食器や料理にあまり興味がなかった私ですが、器にかこまれ料理人の方と接していくうち、食材や料理人の腕に加え、器にも料理を左右する大きな力があることに気づき大変興味深く仕事に励んでいます。

そんな私の休日といえば、子供の遊び相手をすることが多いのですが、秘かなストレス解消として、子供と公園に行った際、12年間続けていたバトミントンのラケットを持ち素振りをしています。素振りが終わると動きを兼ねた、フットワークをしますが、我が子以外がこれを見ると大抵“引き”ます。が、お構いなしです。

中学生の頃、部活の先輩や先生がとても厳しく、シャトルを打ち合うのは2年生からと言われ、実際、打てるようになった時は、本当にシャトルを打つのが楽しくてしょうがありませんでした。屋外で風に吹かれようがどこまでもシャトルを追いかけ、打っていたのを覚えています。40歳を前に、実はこの頃と同じ気持ちを感じています。

まだまだ子供が手を離れるまで、練習に行ったり試合に出たりすることは出来ませんが“その日”が来るまで、広島市の公園のどこかで基礎練習を重ねていきたいと思っています。



○ 「時代を語り建築を語る会 (第11回)」報告 語り人：三宅恭次氏 ～広島戦後経済復興を語る～経営者の苦闘と戦後広島の形成～

RCC時代に広島被爆40周年の特別番組「瓦礫の中から～広島経済復興史～」を制作した三宅氏の立場から、当時取材した人たちの貴重な生の声を踏まえた話を聞くことができた。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2015年11月25日（水）18:00～20:00

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ

☆ 被爆40周年特別番組「瓦礫の中から」

・原爆報道が主流の中で、軍都広島ならではの戦後の目覚ましい経済発展の視点から取り上げた。当時毎週土曜日、テレビ番組「経済展望」を担当し、経済界の多くの人にインタビューする機会があった。まだ戦争を体験した人が残っており、余談話を聞かされて彼らの逞しい生き様に心を打たれたのが、この企画を思いついたきっかけ。
・番組の内容は被爆後の経済復興に尽力した人達16人の証言で構成され、軍によるインフラの復旧から銀行の営業開始、ヤミ市から福屋・本通りの復興、東洋工業・三菱重工業の復興、都市計画の復興構想から平和記念都市建設法の制定、支援母体としての二葉会等について語っている。

☆ 制作者としての総括・感想等

・本土決戦を前に広島には第二総軍の司令部が置かれていた。被爆から終戦を迎えるまでは軍の指揮の下、鉄道・電車・水道・ガス・電気等のライフラインが短日間で復旧された。
・金融機関のトップの即断・即決による英断で被爆後2日目に日本銀行広島支店で12の銀行が営業再開。
・三菱重工業・本通りの復興や二葉会の活動も強力なリーダーがいたから可能。ヤミ市から「イズミ」や「フジ」に育て上げた逞しい商魂も良きライバルがいたから。旧呉海軍工廠の技術と人が東洋工業と三菱重工業の発展に多大な貢献。
・戦後すぐのまちづくりの復興構想における市の長島敏復興局長の先見性、平和記念都市建設法実現に向けて法を草案した寺光忠参議院議事部長と任都栗司市議会議長の功績も忘れてはならない。

☆ 制作者からのメッセージ

・先日福岡に行く機会があり、広島のまちとの勢いの差を肌で感じた。旧球場跡地活用も定まらず、広島駅周辺の高層マンションを主体とした再開発にも首をかしげる。昔、札幌・仙台・広島と同列に呼ばれた時期もあったが、現在は仙台にも抜かれ都市間競争に取り残された感がある。経済界も戦後に比べるとあまりに小粒でリーダーシップは期待できない。首長の力量が問われているのではないかな。

<会場より>

・戦後の速やかな復旧に対して職業倫理の質問あり。終戦を迎えるまでは、軍としては本土決戦を控え、国民の士気が落ちるのを恐れて遺体の後始末やインフラ復旧を急ぐ必要があった。終戦以降は広島人の進取の気質や市民の活力に負うところが大きい。

女学生の看護婦や電車の運転手等は親が迎えに来ても、広島に残って仕事をやり続けたという話や戦地から職人が戻ってきて復興に寄与したという話もある。軍の司令だけでなく重層的・複合的な要因で達成されたのではないかな。

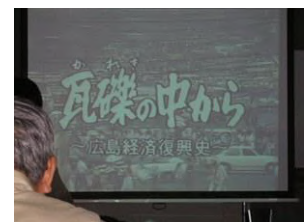
・社会に奉仕するロータリークラブの精神は軍の弾圧を受けて地下に潜る。戦後その精神が解放。同クラブの西日本大会が広島に決定。その会場として公会堂を建設する機運が高まり、支援母体として二葉会が誕生。陰徳の精神で、その後次々と支援を繰り広げた。

<コメント>

映像は公文書館等に保存して幅広く活用されることを望む。（編集委員 瀧口信二）



略歴：慶応義塾大学卒業、1968年中国放送入社、報道部副部長、報道センター部長、テレビ局長、中国放送取締役、RCC文化センター代表取締役社長、現在RCC他の顧問



○人物登場：渡部朋子氏 (ANT-Hiroshima 理事長)

マスコミ等にもよく登場されており、事前の情報収集で渡部さんの全容が掴めたような気がしていたが、やはり会わなければ伝わらないことが沢山あると感じた。

☆ これまでの軌跡

被爆2世として広島に生まれ育つ。大学の卒論で被爆の実相「ヒロシマ」をテーマに取り組み、恩師の言葉「仲間と共に大地を這(は)う」に共感。学生時代にNGOを知り活動に参加して興味を持つ。卒論に対する先生のコメントは「ヒロシマの内と外に橋を架けることができるかもしれない」。これらのことが現在までの活動のベースとなった。

☆ ANT-Hiroshima とは (注：NGO とは非政府組織)

平和都市・広島を拠点とし、国際協力活動・平和教育活動・平和文化交流などを行なうNGO。ANTには「アリ」と「Asian Network of Trust」(アジアの信頼のネットワーク)という2つの意味が込められていて、1人1人の力は小さくとも、信頼のきずなをベースに、国内外の人びと・NGOなどと協働することで大きな平和を実現できると信じて、様々な事業を展開している。

主なものの1つに「Sadakoの絵本プロジェクト」(国際平和事業)がある。原爆の影響による白血病のため12歳で亡くなった広島の少女、佐々木禎子さんの生涯と彼女の同級生たちが行った「原爆の子の像」の建立運動について描いた絵本「おりづるの旅」をダリ語・英語・ネパール語・タガログ語など20ヶ国語に翻訳し、平和への祈りを込めて、紛争地を中心とした世界各地に届けている。この絵本に影響を受けたパキスタン人アーティストのファウジア・ミナラさんと現地で出版した絵本「Sadako's Prayer」もアフガニスタン・パキスタン等で読み聞かせしながら配布している。紛争や自然災害で苦しむ子ども達に希望と勇気をもってもらえると嬉しい。(参照：NPO法人ANT-Hiroshimaホームページ <http://ant-hiroshima.org>)

☆ グリーン・レガシー・ヒロシマ

2011年7月にスタートした「グリーン・レガシー・ヒロシマ」(Green Legacy Hiroshima)は、国内外に被爆樹木の存在と意味を知らせ、その種や苗を届けるという活動を通して、世界中に「平和・希望・共生」のメッセージを発信し、命について考える場をつくることを目標としている。広島は極論すれば大きな墓場。その上に育った樹木は被爆者の命を受け継いでいる。被爆樹木と出会うことで、被爆者が語るのと同じくらいの何かを感じてもらえると思う。木の嫌いな人はいない。木は新鮮な酸素や爽やかな風や光や木陰を提供し、無償の愛を与えてくれる。被爆樹を中心にまちを再構築するのも面白いのではないか…。

☆ まちに対する提案等

過去を捨てて未来は作れない。これまで国際平和文化都市を目指してきたが、被爆71年からは新しいミッションが必要。今は目標が漂流しかけているので、皆で議論してビジョンを練り直す時期にきている。そのために被爆後の復興の過程を若い人に正確に伝えることが大切。音楽・建築・アート・経済など各分野の広島のまちの歴史を市民の視点で紐解き、世界の人に見てもらえるようにしたらよい。

広島は土徳のある地。「平和では飯が食えぬ」と切り捨てて、その世界の素晴らしさと可能性を自ら閉じている政財界の人が多い。世界の大半の民衆はヒロシマに平和への思いを寄せており、その思いに応えれば世界から沢山の人が集まってくる。来訪者がこの地に立ち、この地の人と触れ合い語り合えば、必ずまた来てくれる。

基町は大いなる挑戦の場所。基町は高層アパートができたことだけで復興したとは思わない。基町小学校は外国籍が過半で、良い教育がされている。国際色豊かで多様な人びとが共生した文化が華開けば、世界のモデルとなり、本当の意味で広島戦後が終わったと言える。

コメント

人と人との信頼を深め、その輪を広げて夢を叶えられる人だ。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二 (文責)



略歴：1953年広島生まれ。1976年広島修道大学卒。1989年に「アジアの友と手をつなぐ広島市民の会」を設立。2007年特定非営利活動法人「ANT-Hiroshima」に改称し、理事長となる。

〇こまちなみシリーズ⑨

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、今号から市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

三次・小路巡り

晩秋から初冬にかけて三次は濃い霧に包まれる。

広島から松江方面につながる国道54号線傍、三次市栗屋町の高谷山(標高490m)に登り展望台に立つと、日の出とともに眼前に瀬戸内の多島海美を思わせるような「霧の海」が広がる。

三次は江の川(可愛川)、西城川、馬洗川の合流点、三つの川は江川(ごうのかわ)となり島根県江津市まで流れゆく。私は霧の海を暫し愛でた後、山を下りて祝橋を渡り三次町へ。

三次のメインストリートは巴橋西詰の住吉神社から恵比須神社までの本通り。かつては銀行、郵便局、薬問屋、造り酒屋、農機具店、衣料品店などの老舗、大店が軒を並べ、11月の胡子講には農閑期に入った近郷近在の人たちが多くやってきて賑わいをみせたものだった。このメイン道路から西は中通へ、東は旭町に通じ抜けできる「小路」が幾本もある。

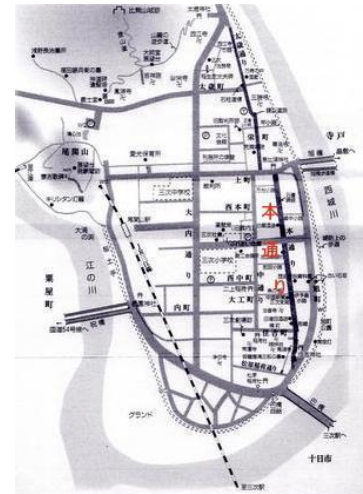
「小路」、「こみち」ではなく「しょうじ」と読む。この小路は江戸期の浅野藩時代から多くつくられている。小路は生産、生活道であるだけでなく、火事の際延焼を防ぐ防火の役割もあった。また必ず側溝が設けられており生活排水路の役割も担った。

小路にはすべて名前が付いている。それは〇〇へ通じていることを示すもの、あるいは大店の名前を付けたものなどである。時代とともに片側の家並がなくなったもの、区画整理で完全に姿を消したものもあるが、いくつかをブラリ歩いてみよう。

前田小路は本通りから三次小学校方面に取り抜けできる。町内屈指の資産家、前田万助の土地や家作があったのに因んでつけられたもの。幼少期、友人の家もあった。本通り側の入り口のところで、両側の民家が上につながりトンネル状になった珍しい小路。

1972年7月、梅雨末期の集中豪雨で三次の市街地はほとんど水に浸かった。西城川が氾濫、旭町の堤防を越え本通りなどへ流れ込んだのだ。この水害をきっかけに旭町の上の段(堤防部分)の古い家並はすべて移転を余儀なくされ、堤防の嵩上げが行われた。かつて私の家も上の段にあり、石段を降り、畠中小路を通過して本通りに抜けることができた。実は小さいころは「〇〇さんのところのショージ」と言っていたので、今回、現地に立つ石柱で「畠中小路」であることを初めて知った。なんでも江戸期のころはこの周りに畑地があったのでつけられたとか…。

このほか「魚の棚小路(うおのたなしょうじ)」は江戸期に魚問屋があったところ、昭和40年ころまで魚屋、仕出し屋、豆腐屋、床屋、食堂などがあり盛り場的な通りだった。いまも2、3軒小料理屋がある。伊予屋小路は伊予屋という海産物問屋があったところ。「マンコショージ、マンコショージ」言っていて、なんと卑猥な名前の小路があるもんだとてつきり今の今まで思っていたところは「万光小路(まんこうしょうじ)」、万光院と



三次町地図



前田小路



小路



旧三次郵便局
(写真：筆者撮影)

いうお寺に通じていたが、今やそのお寺はなく名前だけ残っている。

恵比須神社からさらに北へ太歳神社の間にも小路があり、合わせて13か所。

本通りには本卯建の上がる旧増田酒店など古い建物や旧三次郵便局(現市立歴史民俗資料館)、旧広島銀行三次支店の洋風建築などがあり、わずか700m足らずの通りをそぞろ歩くと、半世紀以上前の賑わいを見せた街並みが蘇ってくる。

(編集委員 三宅恭次)

○特別寄稿

ロンドンの大規模な建築イベント「Open House」について

中国地方整備局営繕部計画課長 安齊真吾

Open House London とは

「Open House London」は、毎年9月の第3週末に開催されているイベントで、ロンドン市内の850以上の建築物をすべて無料で一般に公開するというものです。対象となる建築物は、公共建築物、オフィス、住宅など様々な種類です。2014年は約25万人が参加し、訪問数は延べ37万を超えたそうですから、その規模の大きさが分かります。

イベントの様子

私は、少し前になりますが、ロンドンに留学していた2008年と2009年に、このイベントに参加しましたので、その時の様子をご紹介します。

特に人気があったのは、金融街のシティに位置する「ロイズビル」(設計:リチャード・ロジャース)です。午前中のうちに行きましたが、既に行列が伸び、2時間待ちということで、諦めてしまいました。民間のオフィスビルで、このように通常は公開されていない建物は、大変人気があるようです。



ロイズビル前の様子

また、タワーブリッジの近くにあるロンドン市庁舎(設計:ノーマン・フォスター)も、たくさん人で溢れていました。こちらはエレベーターで最上階に行くよう誘導され、そこから不規則な螺旋階段で最下階の議場まで下りていくものです。議場では、席に座ってくつろいだり、寝そべて写真を撮ったり、思い思いに建築を楽しんでいました。



ロンドン市庁舎の内部

他にも、ある建築設計事務所の建物では、集まった一定の人数ごとに、設計者自らが案内する建物ツアーを行っていました。また、官庁街のホワイトホールにある国の庁舎では、ボランティアの解説者が資料を配ったり、解説したりしていました。

このような感じで、Open Houseの週末は、見学待ちの行列が、街中のあちこちに見られました。

主催者

このイベントは、Open-cityという建築の教育・普及啓発を行う慈善団体が主催し、その他の各種団体の支援により実行しているものです。Open Houseの目的は、「建築の専門家でない一般の人々が、建築に対する理解を深めること」であり、その方法として「直接体験し、触れてもらうこと」を実践しています。



イングランド銀行前の行列

現在、Open Houseは国際的に組織化されており、ヨーロッパ(ローマ、バルセロナ、アテネ、ウィーンなど)、北米(ニューヨーク、シカゴなど)、南米(ブエノスアイレス)、オーストラリア(メルボルン、ブリスベンなど)、中東(エルサレムなど)の30都市で開催されるようになっていきます。

おわりに

Open House の目的は一般の人々に建築に対する理解を深めてもらうことですが、このように大勢の人々が参加していることが、ロンドン市民の建築に対する理解の深さを物語っていると感じました。

日本では欧米と比べ、建築の専門家以外で、建築の文化的な価値を認識している人は少数であると感じますが、このようなイベントは示唆に富むものと思います。

□編集後記

踊り場に立って

階段を上る時、一定の高さになると一旦一休みできる場所を設けます。ここを踊り場と呼びます。お気づきかと思いますが、今回号では図らずも幾つかのキーワードが発見されます。

井上英之さんは、木村尚三郎先生の言葉「**振り返れば未来が見える**」と引用されています。広島復興の軌跡「世界平和記念聖堂」では、教皇ヨハネ・パウロ二世の平和アピールの中の「**過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは平和に対しての責任を担うことです。**」という。

また、渡部朋子さんは、「**過去を捨てて未来は作れない**」と指摘されています。急いで登って来たものこのままさらに登るのか、右に曲がるのか左に曲がるのか、それとも昇るのを止めて降りるのか、冷静に足元を見つめてみるものが求められます。

70年を過ぎたその時に、私達のまちひろしまを育む山、川、海そして先人たちのたゆまぬ生き様の中から、未来に向けて平和な暮らしを実現する夢が正夢となりますように。

(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員

| | |
|------|--------------------|
| 石丸紀興 | 広島諸事・地域再生研究所主宰 |
| 高東博視 | 心豊かな家庭環境をつくる広島21理事 |
| 瀧口信二 | 広島アイデアコンペ実行委員会事務局 |
| 通谷 章 | ガリバープロダクツ代表 |
| 前岡智之 | 中国セントラルコンサルタント代表 |
| 三宅恭次 | 元中国放送役員 |